

玄海原発から30km圏内の吉井町では

地震や津波よりも玄海原発による事故被害が心配です

「広報させほ3月号」には時期をえた特集が組まれています。その「まえがき」のなかで、佐世保市での自然災害の可能性について

「東日本大震災は想定外だったといわれているように」という記述が引用されていますが、各種の研究・書籍を参照すると本当はどうであったか、疑問のあるところ。一方、「県民だより3月号」にも、津波の潮位についても記述されているので一読を。

ところで、自然災害の



吉井町は玄海原発から30km圏内に

「地震」よりも、吉井町では人災である「原発事故」こそが身近な確率の事故のようです。

「朝日新聞」3月6日付けの記事では、「玄海劣化」のお原因不明との見出し。詳細は同紙の記事を讀んでいただければと思います。が、要するに九電側は「原子炉の安全性」を強調し、

専門家の声は「第三者の分析が必要」と疑問視。

福島原発の事故によるこれだけの被害と税金の果てしもない支出がなされる中で、まだ「安全神話」にすぎがりついた九州電力の姿勢。玄海町・佐賀県・政府経済産業省関連の問題もすつきり整理されていない中で、「再稼働」のモードで進められている原子力発電。30キロ圏内にある吉井町では、自然災害よりも原発こそが一番危険な災害ではないでしょうか。

「民報 吉井」3月号に引き続き、現在の状況を報告します。3月12日、玄海原発を無くしたいという願いを持った人たちの「運転差し止めを求めた原告」の数が1370人増えて、合計3074人

「玄海原発をなくそう！九州玄海訴訟」原告は3000人に

になりました。提訴後の集会には120名の方たちが参加されました。なお、三回目の提訴は、5月30日に予定されています。吉井の町からも追加提訴されてはいかがでしょうか。

炭坑の町だった吉井町の昔を聴く

数年前に佐世保市に合併された吉井町。かつては、県北の有数の炭坑の町。日々、生まれ変わる私たちの街の当時を知る人々も年々少なくなっているようです。

そこで、吉井・潜竜地区にあった炭坑で働いていた方に、その当時の様子を聴かせていただきました。

福井さん（80代・男性）

私は18歳になるとすぐ石炭を掘る作業をすようになりました、つまり採炭夫として働き始めたわけですね。1950年（昭和25）頃のだったかなー。

住友潜竜炭坑。会社は吉井のすぐ隣の江迎町田の元直谷の松原住宅でした。現在もその住宅は残っていますがね。その頃は今と違って労働時間は「9時間」です。ひどいもんです。

しかし、組合が強くてですね、現場での職場闘争がだんだん強くなってきた。で、次第に労働条件を改善させてきて、「8時間労働」を勝ち取ったわけです。会社の恩恵でなかったのじゃないんです。そうですね、そ

①

出だしは1950年、住友潜竜炭坑 賃金は、坑内で2万5千～3万円 坑外は1万5千円～1万8千円位

ういううことから職場の話は自然と労働条件のことが中心になりましたね。昼休みにしても、当時は「1時間」とることも、闘争によって勝ち取りましたし、昼飯を食べながら組合活動

好きですし、酒が手放せませんね。会社には、私たちとは違って、当然事務系の仕事もあるわけですが、お互い挨拶を交わすなどして問題が起ることはなかったと思いますよ。そうですね、当時の話題と言えば、私たちの周りには、小さな炭坑がたくさんありましてね。そんな炭坑での仕事内容などのこともよく耳にしていたのですが、私たち大手の炭坑での闘いが結果的に中小炭坑における労働条件改善につながっていたなんて事をよく聴きましたね。

当時、「日本一」と私たちの炭坑は言われていたらしいんですが、一ヶ月の賃金は、坑内で25000～3万円。坑外は15000円～18000円くらいでしたかね。だから、坑内夫であった私などは、まあ満足といえる額なんじゃないかなかったですかね。 (つづく)

の報告を聞くなどしてました。仕事が終わった後は、炭坑夫の仲間が仲がいいんですよ、「ちよつといっぱいやるか」というようなことで、近くの仲間の家へ寄って集まり、よくわいわい騒いで呑んでいましたね。そのせいか、今でも呑むのは

* 『ふるさとの歴史 吉井町』によると、「話し」に出てくる当時の人口は、1950（昭和25）1万8800人（2192戸）、1955（昭和30）1万1992人（2425戸）、人口のピークは1959（昭和34）年の1万3542人（2884戸）で、徐々に減少が続き、やがて合併前頃には5000人台が続く。

消費税に頼らない別の道があります

社会保障の充実
財政危機の打開
日本共産党の「提言」
ダイジェスト版
をぜひ